

まえがき

ある学生が神妙な顔つきでこう言った。

「論文を読んでも意味がよくわかりません。意味がわからないので読もうという気にもなりません。卒業論文は書けるのでしょうか」

申し訳ありません、と言いたげな告白口調なので、私も真剣な面持ちで「そうか、そうか」と慰めたが、実を言うと私も同じようなものである。論文はもちろん専門書など、骨の折れるものはあまり読まない。読んでいるふりをしないとイケない立場になったのでそんな格好はしているけれど、本当は自慢できるほどの読書家ではない。

でも、本はまあまあ好きだ。買うのも所蔵するのも嫌いではない。本を触ったり、眺めたりするのほどほどに好きである。少しは読む。読んで意味のわかる本は読む。難しい本は15分ほどで力が尽きる。その程度の読書家だ。

大学生のころ、なけなしの金をはたいて買った本に戸坂潤全集がある。勁草書房、全5巻。各巻2800円から3200円。当時としては奮発した買い物だった。

戸坂は「如何に書を選ぶべきか」でこう述べている。

「本を買うのはすぐ読むためとばかりは考えない。私にとっては買って持っている本は、読んで持っている本の三分の一の価値、読んで今持っていない本の、二分の一位いの価値、があるように思える。本は読むためばかりではなく、見るためのものでもあるし、所有するためのものでもあるというのが、私の持論である¹⁾」

なるほどなあと、学生だった私は納得した。読まなくても買って持っていれば、読んで持っている本の三分の一の価値があるのなら三倍買えばいいのだと早合点したのだ。それ以降、なるべく本は買うようにした。学校教員になってなんの研修費も出なかったが、薄給のなかから書籍代は工面した。書齋から本がはみ出し、段ボール箱に入れ、積み上げ、また買い足した。本は増えたが、そう賢くなったような実感はないまま今に至っている。それもこれもすべて戸坂の箴言に従ったせいである。

戸坂潤は戦前の唯物論哲学者。カントからマルクス主義へと研究を進め、唯物論研究会を創設した。1938年、治安維持法で検挙され、終戦を7日後に控えた1945年8月、長野刑務所で45歳の生涯を閉じている²⁾。

戸坂の著作を読んでいて、これで拘束され獄死したのでは割に合わないなあと慨嘆した。マルクス主義に関する論考が多いものの、そのいずれもが冷静で深い思索に基づいた歴とした哲学書である。社会を転覆させようという扇情的なアジェンションは見当たらない。

1) 戸坂潤全集第5巻、勁草書房、1967年、p.449
2) 森宏一編著、哲学事典増補版、青木書店、1981年、p.348
3) 戸坂潤全集第1巻、勁草書房、1966年、p.308

4) デジタル大辞泉から

5) 『岩波ブックレット・シリーズ昭和史 No.15』、岩波書店、1989年、p.14

6) 発達保障研究集会（2014年3月、東京）勝野正章、講演資料などを参照

彼の著作によく登場するのが科学的精神という言葉である。

「科学的精神はあれ之の精神の一つなのではない。普遍的な精神なのだ。ヨーロッパ精神でもなければギリシア精神でもない、日本の精神でもなければ東洋的精神でもない。そういうものと並ぶものではないのだ。夫々の異なった時代・社会の・現実のある処に常に、要求されねばならぬ精神のことだ。云わば之は現実そのものの精神だと云ってもよい。——処でここからこういう一つの結論が出て来る。科学的精神の働きかける処は常に現実であり、常に目のあたりある処の現実だ。科学的精神はまず足下の現実を掴むべき機能を持っている。」

1937年の日付が入っているので、昭和12年の著作だ。この年の7月、盧溝橋で日中両軍が衝突、日中戦争が始まっている。8月、国民精神総動員体制が敷かれ、全国の街々で千人針をお願いする姿が見られた。「一枚の布に、千人の女性が赤糸で一針ずつ縫い、千個の縫い玉を作った布。出征兵士の武運長久を祈って贈った」とされる。軍歌が続々と発表され、12月には南京大虐殺が起きている⁵⁾。

ファシズムが激化し、声高な好戦論に熱狂する日本にあつて、戸坂は「まず足下の現実を掴む」ことが科学的精神であると説いた。彼が検挙される前年、殺される8年前のことである。

あの時代に比べると現代日本は平和だという意見もあろう。しかし、本当にそうだろうか。

相対的貧困率（可処分所得が国民の中央値の半分以下の世帯。健康で文化的な生活が困難とされる）が2010年で16・0%、1985年以降最悪の数値であつて、OECD（経済協力開発機構）30カ国平均の10・6%よりかなり悪い。子どもの貧困率はさらに高く、6人に1人が貧困状態にあるという。一人親世帯では半分以上が貧困状態にあり、これはOECDで最下位。電気や水道を止められて餓死する親子が後を絶たない。餓死する数の何倍もの家族が、真冬でもストーブをつけずに寒さをがまんしている。

生活保護受給者は2012年で211万人。就学援助率は、2001年の9・7%から2010年の15・3%へと上昇を続ける。非正規雇用は1992年の1052万人（21・7%）から、2012年の2042万人（38・2%）と急上昇で、政府はさらに非正規雇用の常態化を進めている。年間の自殺者は3万人を超え、そのなかでも20代の自殺が上昇傾向にある⁶⁾。

この現状を「日本は内戦状態にある」と呼ぶ人もある。

安倍内閣は「積極的平和主義」の名のもと、「集団的自衛権の行使は解釈改憲で行える」と豪語し、特定秘密保護法で国民の知る権利を奪い、戦争のできる国を目指して憲法改悪の途を突き進もうとしている。戸坂の生きた時代を彼岸視できるほど、この国は平和ではない。

茂木俊彦先生（ここだけ敬称付き、だつて尊敬しているし、ご存命だから）が、2014年4月号の『クレスコ』に書いている。「今の子どもをどう見るかはかんたんではない。教育がうまくいかないときには教師だってイライラがつるものだ」と前置きして、こう続ける。

「そのようなときには、意識して冷静になるよう心がけることが必要です。冷静になってどうするのか。視点を子どもの側に移し、子どもは、教師や友だちについて、勉強その他の活動について、どのように感じ、どんな考えをしているのかと推察してみるのです。学校生活のなかで何かおもしろくないこと、不安をおぼえることがあるのかもしれないかもしれません。少し視野を広げてみると、家庭生活に何かの問題があつて、それを背負つて学校に来ているのだろうか、と考へてみる必要がある子どももいるでしょう。」

ここで語られていることは、戸坂の言う「科学的精神」、すなわち「足下の現実を掴む」ことそのもののように思う。

先日、福島県いわき市のいわき母子訓練センターの学習会にお招きいただいた。東日本大震災、福島原発事故の後にあつても、子どもたちの生活に正面から向き合おうとしている人たちがあつた。障害のある子どもだけでなく、両親の抱える困難にも、そしてきょうだい児のサポートにも細やかな活動が続けられていた。

沿岸部の町は人口も大幅に減り、復興の兆しもなかなか見えてこない。海岸線は大きな重機の音だけが響いていた。そのなかにあつて「足下の現実を掴む」人たちの努力が営々と続けられている。それは子どもたちの将来に結実するのだろうか。

「人間を大切にすること」に携わる者が現代日本の矛盾に立ち向かうためには、まず足下の

現実を深く捉えること、それも障害児者の示す現実をこそ深く理解することなんだろうとあらためて感じた。

この本は、全国障害者問題研究会月刊「みんなのねがい」誌に2013年4月から翌年3月まで連載したものに、新たに書き下ろしたものを加えたものである。本書前半部分が連載に加筆したもの、後半が新規部分となる。

なお、戸坂潤について研究しているわけではありません（謙遜ではありません）。このまえがきを書き終わった時点で、戸坂全集は箱にしまい、本棚に戻します。哲学好きな方、「今度、三木に出会ったら戸坂論をふっかけてみよう」などといくれぐれも思わないでください。伏してお願いいたします。